

芦屋大学論叢 第77号

(令和4年8月8日)抜刷

《研究ノート》

球技系スポーツ選手における  
パーソナリティに関する検討

— 芦屋学園ジュニアユース・芦屋学園高等学校を対象として —

金 相 煥  
別 當 和 香  
山 口 将 史



## 《研究ノート》

### 球技系スポーツ選手におけるパーソナリティに関する検討

－ 芦屋学園ジュニアユース・芦屋学園高等学校を対象として－

金 相 煥 (1)

別 當 和 香 (1)

山 口 将 史 (2)

(1) 芦屋大学臨床教育学部

(2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科コーチング学専攻

#### 1. はじめに

球技系スポーツにおいて高いパフォーマンスを発揮するためには、「心・技・体」といわれる心理的要素と体力・技術などの身体的要素が調和していることが重要である。黒田 (2017) は、「心」が 50%、「技」が 30%、「体」20%という割合での指導が育成年代には適切であると述べている。また、中学・高校生においては学業とスポーツを両立することが必須であるため、フィジカルコンディションの維持・向上とメンタルコンディションを良好な状態に保つことのできるパーソナリティの形成が特に重要であると考えられる。

金ら (2020) は、課外活動における一貫指導システムを構築したことにより、芦屋学園サッカー部門における募集人数増加と学校経営安定の成功に至った。しかし、今後の課題として「明確な指導内容の構築や環境の整備が必要」とも述べている。また、日本サッカー協会 (2009) では、「育成年代の心の成長には長期的な視点に立って働きかけいくことが必要」と述べており、組織下において各カテゴリーで戦っていくためには、各カテゴリー内で選手が同じ目標・目的意識・課題を遂行していくことが重要であり、そのためには、自分の置かれている立場・行動・役割などの自我状態を認識することが必要である。これらに鑑みると、組織下においてスポーツを実践及び指導するためには、自他の性格や選手の行動パターンを把握し、配慮した指導や組織連携をおこなう必要があると考えられる。

先行研究としては、スポーツ経験が、競技者のパーソナリティに及ぼす影響に関する研究が数多く報告されている (渡邊, 2002)。中澤 (2011) は、パーソナリティ検査のエゴグラムを用いて、スポーツを通じて 5 つの自我状態の中で、父親的で批判的な親の自我状態 (Critical Parent) と母親的で養護的な親の自我状態 (Nurturing Parent) の成長が促進されていることを明らかにしている。また、野口ら (1957) や林 (1985) の報告に鑑みると、スポーツ経験の多いものほど、スポーツがパーソナリティに及ぼす影響を強く受け、運動部での生活経験年数が長くなるに従って、非部活生より活動性や社会的外向性が増大すると言及している。さらに、渡邊 (2002) は、選手を各ポジションに配置する際、個々の体格・運動能力・技術に加え、心理特性を踏まえた配置を試みることによって、効果的かつ計画的なチーム作りを進めることができると報告している。以上のことから、パーソナリティに着目した指導は重要であると考えられる。

そこで本研究では、芦屋学園サッカー部門の育成年代に相当する中学生・高校生を対象とし、各学年におけるパーソナリティの差異及び傾向について分析することで、一貫指導システムをより効率よく展開するための心理的側面に関する課題を明らかにし、サッカー競技を含む球技スポーツにおける一貫指導システム構築の一助となる基礎的資料にすることを目的とした。

## 2. 方法

### 2.1 調査時期

2021年11月～12月（ポストシーズン期）

### 2.2 調査対象者

調査対象者は、芦屋学園ジュニアユース選手 66 名（全て男子、以下芦屋 JrY）、芦屋学園高等学校選手 82 名（全て男子、以下 AG 高校）である。（表 1）

対象者の競技種目はサッカーであり、競技レベルは様々であった。なお、調査対象者には守秘義務の厳守及び得られたデータは本研究の目的以外には使用しないことを説明しデータ使用の了承を得た。

表 1 調査対象者

	1年生(年齢)	2年生(年齢)	全体
芦屋JrY	28名(13歳)	38名(14歳)	66名
AG高校	38名(16歳)	44名(17歳)	82名

### 2.3 調査方法

フェイスシート及び桂式自己成長エゴグラム（桂ら，1999．以下「エゴグラム」）を用いた集合調査法による質問紙調査を行った。フェイスシートでは、「氏名」「年齢」「学年」「ポジション」の記入を求めた。フェイスシート及びエゴグラムについて事前に説明し、上述にある対象選手へ配布した。なお、各カテゴリーの指導者及び被験者に調査の主旨、並びに倫理規定について説明し、本研究への同意を得た上で調査を実施した。

### 2.4 エゴグラム

エゴグラムとは、1957年、エリック・バーンが提唱した交流分析理論に基づき、ジョン・M・デュセイによって創始されたパーソナリティ検査である（佐々木ら，2011）。エゴグラムは人間の自我状態を5つに分類し、パーソナリティを可視化できるように考案されたものである。今回は、エゴグラムの日本語版のひとつで、桂戴作が作成したものを改訂、標準化した自己成長エゴグラム（Self Growup Egogram:SGE）を用いた（芦原，1992）。本検査は50項目からなり、3件法（「はい」：2点、「どちらでもない」：1点、「いいえ」：0点）で回答を求めた。他のエゴグラムと同様に交流分析の理論に基づき、“父親的で批判的な親：Critical Parent（以下CP）、母親的で養護的な親：Nurturing Parent（以下NP）、大人：Adult（以下A）、自由奔放な子ども：Free Child（以下FC）、ならびに順応した子ども：Adapted Child（以下AC）”の5種の自我状態の粗得点とパーセンタイル得点が算出される。分析には、粗得点を用いた。また、芦原（1995）を参考に、交流分析における自我状態の肯定的側面と否定的側面の特徴を表し（図1）、結果の分析をおこなった。

## 2.5 分析方法

カテゴリーごとにおける選手のパーソナリティの差異及び傾向について検討するため、エゴグラムの5つの尺度ごとに Shapiro-Wilk 検定で正規性を確認した後、5つの尺度についてそれぞれの年代内および年代間で対応のない t 検定をおこなった。なお、統計学的有意水準は全て5%とした。

肯定的側面	自我状態	否定的側面
理想の追求 道徳的,倫理的 善悪をわきまえる	CP	責任追及 支配的,威圧的 厳しすぎる,とがめる,偏見を持つ
温かさ 養護的,保護的 他人への思いやり,愛情	NP	甘やかし 過保護,過干渉 世話のしすぎ
情報の収集,分析 客観的理解,現実的判断 計算,工夫	A	冷たい 人情味に欠ける 人の気持ちより事実を優先
自由奔放,明るい 創造的,直感的,好奇心 天真爛漫	FC	自己中心的 本能的,衝動的 わがまま
素直 協調的,適応性 他人を信頼	AC	自信喪失,自責の念 自主性なく依存的 黙って自分の殻に閉じこもる ひねくれ反抗する

図1 分流分析における自我状態の両側面

## 3. 結果及び考察

### 3.1 エゴグラム結果から見た芦屋学園ジュニアユースの傾向

エゴグラムの結果から、2年生、1年生共に「FC」が高い傾向が見られた。また、「CP」「NP」「A」の3つの項目において、1年生の得点が2年生の得点よりも、有意に高い得点となった。この結果から1年生の方が2年生より、責任感や相手を思いやる気持ち、計画性などが高いことが示唆された。2年生においては、「A」「AC」が低く、「FC」が高いという結果であった。「自己主張が強い。人情に厚く感情的である。」という傾向が示唆された。また、「CP」「FC」の高さと「AC」の低さから、「思ったことを何でも発言、態度で表す。」といった傾向が示唆された。1年生に関しては、「CP」「NP」「A」が中程度にあり、「FC」が高く「AC」の低いという結果であった。この結果から、「自信があふれている。厳しい面と優しい面を兼ね備えている。」「自己中心的で協調性に欠ける。」といった傾向が示唆された。1年生において、「自信があふれ

ている」という結果が出ることは、チームにとって肯定的な結果である。全体からは「AC」の低いという結果であり、1・2年生ともに、「人の話を最後まで聞かない。」「協調性に欠ける。」「客観的に物事を見ることが苦手。」といった傾向が示唆された。これには、両価性（アンビバレンツ）などの行動が表れる思春期の時期特有の要因（厚生労働省，e-ヘルスネット）も考えられる。

表2 芦屋学園ジュニアユース

項目	芦屋JrY1年生	芦屋JrY2年生	t検定
	(n=28)	(n=38)	p
CP	15.2±1.9	13.1±4.1	0.039*
NP	14.4±3.3	11.9±4.1	0.024*
A	13.8±2.9	9.6±3.9	0.000*
FC	16.0±2.6	13.8±4.4	0.05
AC	10.5±4.6	10.1±4.2	0.82

\* : p<0.05

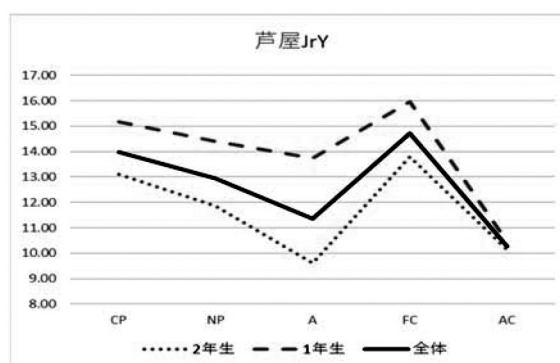


図2 芦屋学園ジュニアユース

### 3.2 エゴグラム結果から見た芦屋学園高校の傾向

エゴグラムの結果から、2年生、1年生の間に有意差はなく、両学年共に「CP」が高く、「AC」が低い傾向が見られた。2年生においては、「CP」が高く、「NP」「A」「FC」が中程度、「AC」が低いという結果であった。この結果から「リーダーシップ力が高いが思い込みが強い。相手の気持ちを考えず発言する。協調性に欠ける。」という傾向が示唆された。「NP」の向上を図ることで、自分と違う考えに対しても柔軟な対応や行動がみられ、それにより必然的に協調性（「AC」）が向上していくといえる。1年生に関しては、「CP」が高く、「A」「AC」が低いという結果であった。この結果から、「責任感が強い。感情的。明るくユーモアがある一方で、自分が絶対正しいという考え。すぐにカッとなる。冷静な判断が苦手。」といった傾向が示唆された。「NP」の向上を図ることで、協調性（「AC」）が向上していくといえる。また、冷静な判断力は競技力向上にも必要とされるため、「なぜ、そうなったのか」といった問題提起や客観的な目で物事を捉える働きかけや講習をおこなうことで、「A」の向上を図ることができる。全体からは「AC」の低いという結果であり、高校生全体で、上述したような講習や働きかけが必要であることが示唆された。

表3 芦屋学園高等学校

項目	AG高校1年生	AG高校2年生	t検定
	(n=38)	(n=44)	p
CP	15.7±2.7	15.8±2.7	0.98
NP	14.5±3.1	14.9±2.5	0.47
A	12.6±4.3	13.9±2.8	0.12
FC	15.0±3.1	15.3±2.8	0.60
AC	11.1±4.2	12.3±3.9	0.18

\* : p<0.05

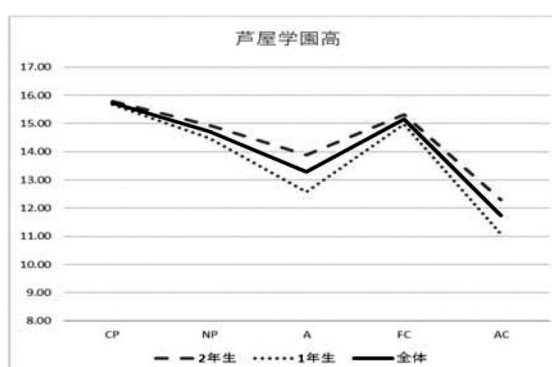


図3 芦屋学園サッカー部

### 3.3 エゴグラムからみた芦屋学園高等学校・ジュニアユース全体の傾向

学園全体においては、ジュニアユースより高校生の方が、「CP」において有意に高いという結果であった。そのほかの項目について有意差はみられなかったが、両カテゴリー共に「CP」「FC」が高く、「A」「AC」が低い傾向が見られた。また、全体的に高校生の方が点数は高いという結果であった。やはり、目的を持った一貫指導をおこなっていると、同じ型の傾向の中で点数の向上がみられることが今回の研究で明らかになった。また、経験を積むことで、責任感やリーダーシップ力の面において、大きな向上がみられるということが示唆された。さらに、高校生・ジュニアユースの両方において、「AC」が低いといった結果であった。競技をする上で、自己主張が強いことも必要な要素ではあるが、他人の意見や人の話を聞き入れる能力が乏しいと、チーム力を構成するにはマイナス要因となってしまう。今後、「AC」の向上を図るためにも、「NP」や「A」の項目に準じた「計画性」「冷静な判断力」「協調性」「気配り」といったキーワードを取り入れた練習法や講習会が必要であることが示唆された。

表4 芦屋学園全体

項目	AG高校全体	芦屋JrY全体	t検定 p
	(n=82)	(n=66)	
CP	15.7±2.5	14.4±3.5	0.001*
NP	14.7±2.8	13.3±4.0	0.593
A	13.3±3.7	11.9±4.1	0.604
FC	15.2±2.9	15.2±3.9	0.721
AC	11.7±4.1	10.6±4.4	0.293
* : p<0.05			

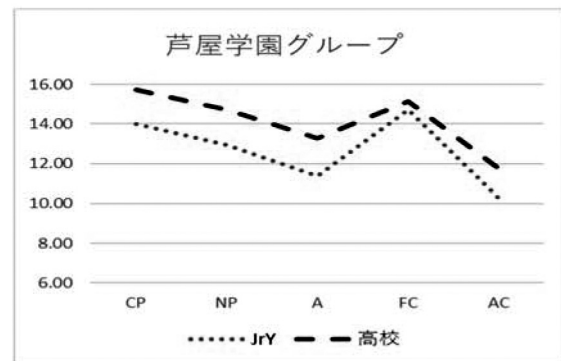


図4 芦屋学園全体

## 4. まとめ

### 4.1 結論

本研究では、芦屋学園サッカー部門の育成年代に相当するジュニアユース・高校生を対象とし、各カテゴリーにおけるパーソナリティの差異及び傾向について分析をおこなった。

分析の結果、下記のことが明らかとなった。

- ・ジュニアユースにおいては、2年生、1年生共に「FC」が高い傾向が見られた。また、「CP」「NP」「A」の3つの項目において、1年生の得点が2年生の得点よりも、有意に高い得点となった。2年生は、「A」「AC」が低く、「FC」が高いという結果であった。1年生は、「CP」「NP」「A」が中程度にあり、「FC」が高く「AC」が低いという結果であった。
- ・2年生、1年生の間に有意差はなく、両学年共に「CP」が高く、「AC」が低い傾向が見られた。2年生は、「CP」が高く、「NP」「A」「FC」が中程度、「AC」が低いという結果であった。1年生は、「CP」が高く、「A」「AC」が低いという結果であった。
- ・学園全体においては、ジュニアユースより高校生の方が、「CP」において有意に高いという結果であった。両カテゴリー共に「CP」「FC」が高く、「A」「AC」が低い傾向が見られた。そのほかの項目について有

意差はみられなかったが、全体的に同じ型の傾向の中で高校生の方が点数は高いという結果であった。

以上の結果は、球技スポーツにおける一貫指導システム構築の一助となる基礎的資料として有用な知見であるといえる。

#### 4.2 今後の展望と課題

芦屋学園サッカー部門では、一貫指導システムの構築をおこなうことで、長期一貫指導による競技力向上や人間力形成の向上を目指している（金ら，2020）。今回、エゴグラムを用いて選手のパーソナリティを分析・把握したことは、指導者と選手間及び選手同士の相互理解、相互信頼、相互尊重を築き上げる新たなコミュニケーションツールとして極めて有用であり、指導者と選手の理想的な関係性の構築やチームパフォーマンス向上に繋がる可能性があるといえる。そのため、今回のエゴグラムの結果から、各カテゴリーにおいて、チームと個人に分類した介入指導を取り入れることで、一貫指導システム内に、選手のパーソナリティを配慮した効果的なコーチングを導入することができる。加えて、サッカー競技においては、サッカートレーニングのみならず、日常生活におけるライフスタイルを向上させていくことも重ねて重要である。それゆえ、ライフスキルの向上がサッカースキルの向上につながると考え、今後は上述した結果をもとに、チーム・個人に分類した介入指導の考案、スキル向上のためのクリニックや講習を積極的に取り入れていく必要性が示唆された。また、今回の研究では、芦屋学園サッカー組織の差異や傾向の調査のみであるため、今後更なる組織力向上を図るためには、各カテゴリーにおいて全国レベルのチームや諸外国のチームと比較検討する必要がある。

### 5. 謝辞

本研究の分析に関して、芦屋学園サッカー部門に関する様々な貴重な資料を御提供いただき、また、一貫指導システムの構築について、論旨の展開に貴重な指導と助言をいただいた以下の皆様に対し、ここに記して深謝致します。

芦屋大学サッカー部：新開英幸，河合学，望月航介

芦屋学園高校サッカー部：許泰萬，崔聖健，倉本仁志，吉本英寛

芦屋学園フットボールクラブ：小川和志，加藤琢馬



## 参考文献

- 1) 黒田剛 (2017) 勝ち続ける組織の作り方ー青森山田高校サッカー部の名将が明かす指導・教育・育成・改革論. 株式会社キノブックス. P23.
- 2) 金相煥・別當和香 (2020) 課外活動における一貫指導システム構築の現状と課題ー芦屋学園サッカー部門の改革事例からー. 芦屋大学論叢, 第 77 号.
- 3) 芦原睦・桂戴作 (1992) 自分がわかる心理テストー知らない自分が見えてくる, 講談社.
- 4) 芦原睦 (1995) 自分がわかる心理テスト PART 2, 講談社.
- 6) 実践スポーツ心理学研究会 (2018). わかりやすいスポーツ心理学, 文化書房博文社.
- 7) 日本サッカー協会 (2009) 育成年代の指導者のかかわり iii メンタルケア
- 8) 野口義行・岡部弘道・野口広敏・近藤衛・和田寿・山崎剛 (1957) 運動選手の性格特性についての研究. 体育学研究第 2 巻第 5 号, 227-173.
- 9) 中澤史 (2011) エゴグラム療法によるアスリートへの心理サポートの検討ー自我発達と心理的競技能力および社会的スキルの獲得. 財団法人上月スポーツ・教育財団スポーツ研究助成事業研究論文.
- 10) 林正邦 (1985) スポーツと人間形成についてースポーツが個人的性格におよぼす影響についてー. 天理大学学術天理大学人文学会, 第 146 巻第 3 号, 68-69.
- 11) 渡邊大志 (2002) ハンドボール競技のポジションに付与される役割が行動様式に与える影響. 平成 14 年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修士論文.
- 12) 佐々木一帆・奥森拓也・片上大輔 (2011) エゴグラムを利用した社会判定エージェント Sociality Judgment Agent based on Egogram. HAI シンポジウム 2011 HumanAgent Interaction Symposium 2011 III-1 A-3.
- 13) 厚生労働省, e-ヘルスネット: 思春期のこころの発達と問題行動の理解.  
<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-03-002.html> (参照日 2022 年 5 月 23 日).

